

郷土かみのかわの歴史・文化財

上三川の地域と歴史 下神主

下神主は、町域の北西部、田川右岸の低地と台地に位置し、北は上神主、東は川中子、南は大山、西側はゆうきが丘・鞘堂と境を接しています。地区の東側を流れる用水路沿いには水環境神主公園があり、四季折々の里の自然と触れ合うことができます。

なお、「神主」の地名に由来については、先月号掲載の「上神主」を参照ください。慶安郷帳に、下神主村の村名が記載されています。江戸時代の初めは宇都宮藩領、貞享2年（1685）に幕府領、享保17年（1732）には旗本領となり幕末を迎えました。天保年間（1830

〜1844）の家数は10戸です。

農閑期には、男は縄・筵作り、女は木綿織を営みましました。また、石橋宿の助郷役を課されており、記録によれば年間平均で人足130人、馬140匹あまり課せられていました。

明治元年（1868）の記録では、田28町9反・畑26町・家数16戸・人数138人、馬10匹とあります。この頃の村の様子は、当時の村議会の議事録に記録されています。道路や用水路の修繕の際には、1戸につき1名が奉仕すること、甲神社祭礼は旧暦3月に天祭、8月に風祭を行い、その費用は各家から徴収することなどが決められていました。

さて、村の鎮守・甲神社は、地区東側の水田の中に鎮座しています。日本武尊を祭神とする甲神社の縁起は次のようなものです。

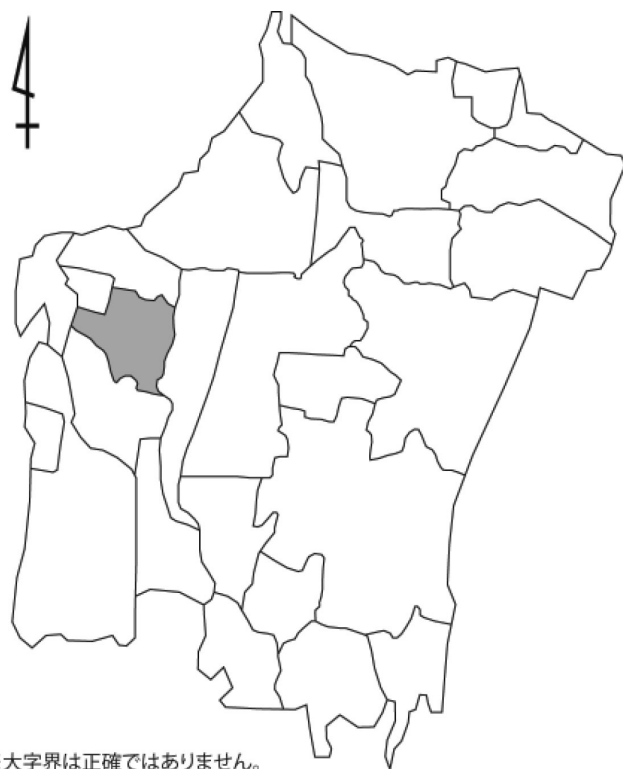
西暦82年、景行天皇の御代、日本武尊が東夷征伐の折に下神主村に宿陣しました。村人達は御一行を手厚く

お迎えし、その褒美として甲一式を下賜されました。その後、村人達は祠を建て、この甲を納めて甲神社と称し、日本武尊を祀って村の鎮守としました。

もうひとつ、甲神社の縁起ではありませんが、甲神社創建の由来といわれる次のような記録があります。

家には、祖先が弘安の役（1281）で武功を立てた際に使用した甲がありました。その甲を埋め、塚を築いて社を建て、兜大明神と称して村の鎮守としたと伝えられています。

はたしてどちらの由来が史実であるのか、今はもう定かではありませんが、古代の口マンが地中に眠る下神主を、散歩がてらに訪れてみてはいかがでしょう。



※大字界は正確ではありません。



田園の中にたたく甲神社の森